

審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

第2回雪のデザイン賞は、全国29都道府県の157の個人や団体から191点の作品の応募を得ました。

今回も、まずスライドによる1次審査を行い、この中から47点が選ばれ、実際の作品による最終審査が加賀アートギャラリーで行われました。

審査に先立って、私は中谷宇吉郎雪の科学館に新設された、ダイヤモンドダストの実験装置を見る機会を得ました。それは一条の煙のような実に微細な氷の粒が漂い、その氷の粒はみるみる広がりを増し、成長して虹色を帯びます。これは、地表付近のダイヤモンドダストや雲の中で雪ができていく始めの様子を示す実験とのことですが、小さな箱の中に広がる幻想的な光景は強く心に焼き付くものでした。改めて、自然の深遠な営みの凄さ、美しさに心を打たれました。

このような雪や氷の自然の営みをモチーフにしたり、イメージして、デザインを進めることは、刺激的でもあり、又一方ではなかなか難しいテーマかも知れないなど思いを巡らしながら、どのようなデザインの応募が見られるか、わくわくした気持ちで作品と対峙しました。

審査は前回のように、ディスカッションを繰り返しながらそれぞれの作品の理解を深め、票を置いていく方式で進められ、各賞が決まりました。

金賞の「冬のともしび」は、針金を燃って形作ったうえに、和紙を貼った照明器具で、多く見かける発想のもので、一見稚拙さすら感じさせる作品のようですが、抜きん出たものがあり、そのイメージされた氷の塊がぼんやりと照らし出されたような情景は、実に豊かさを感じさせ、スケール感を超越した造型の強さ、大きさを感じさせる作品です。

銀賞の「SNOW PRINT」は、陶磁を扱い慣れた手によるものであろう、雪が時間を経るとともに解けて行く姿を20cm四方の陶板の上に精緻に閉じ込めた心象風景、陶土や釉薬の異なる特質を上手く使い分けた、テクニックの内在した秀作です。

銅賞の「水彩（アクリル大棗）」はアクリルを旋盤加工し、磨きあげた透明な生地に漆の蒔絵で氷柱のイメージが表現され、内部も色漆で仕上げられ、力強さと気品を兼ね備えた作品、図柄が笹の葉に見える側面もあり、審査員の中でやや評価が下がったのは残念でした。この棗を使った夏の茶席の涼しげな光景を想像すると夢が膨らみます。

奨励賞の「Letter from Heaven」は、実は銅賞と競い合った作品、家族揃っての合作で微笑ましく、また発想も優れており質の高い作品です。英語の表現に今一工夫が欲しいところ。

今回も雪や氷をテーマに様々なアイデアを、そして素材や技術を駆使して、多彩な作品が寄せられ、全体のレベルが高く、破綻を来した作品は見られなかったものの、こじんまりとまとまったものが多く見受けられました。欲を云えばもっとテーマの持つイメージを、幅広い表現で掘り下げて頂きたかったし、もっと自由なデザインの広がりを見せてほしかった。

一方で、入選作品の中に幾つか雪の科学館のミュージアム・グッズに適した作品がありましたが、ミュージアム・グッズとして繋がりが今後できて行くことも、この雪のデザイン賞が回を重ねられることと同様に楽しいことではないでしょうか。